

「シリーズ／比較民話」

(二) 天人女房／白鳥処女

高木昌史

序

日本でも羽衣物語として広く親しまれている「天人女

房」譚は、世界中に類話が分布する昔話の一つである。<sup>(1)</sup>日本昔話の国際基準を示した池田弘子は、この昔話タイプを四〇〇番「失われた天上の妻を捜し求める男：天人女房、羽衣」The Man on a Quest for his Lost Celestial Wife; Tennin Nyooob; Hagoromo に分類した。<sup>(2)</sup>アールネ／トンプソン『昔話のタイプ』A. Aarne/S. Thompson: The Types of the Folktale <sup>(3)</sup>(以下 AT と略記) 四〇〇番を基にしたものである。後者のタイプ名には「天上の」Celestial

がなく、そこに国際比較の難しさが示されているが、本稿では、その点にも触れながら、「天人女房」の世界性を、しばしば同一視される「白鳥処女」<sup>(4)</sup>との関連から考えてみたい。

ところで、柳田國男が強い関心を抱いた昔話の一つは「天人女房」譚である。彼は結局一本の論文にそれをまとめはしなかったものの、例えば、『海南小記』（大正一四年）以来、『桃太郎の誕生』（昭和八年）、『昔話と文学』（昭和一三年）等、あるいは晩年の『年中行事覚書』（昭和三〇年）に至るまで、生涯にわたり天人女房あるいは白鳥処女に關してかなり徹底した考察を試みた。本稿では、柳田の「天人女房」＝「白鳥処女」論を随時参照しながら、

彼が国内に留めた考察を、『昔話百科事典』等、今日の研究状況に鑑みて<sup>(5)</sup>、国際的な視野で比較検討することにする。

## A T 四〇〇の分布

本論に入る前に、アールネ／トンブソンの『昔話のタイプ』<sup>(6)</sup>によって、A T 四〇〇が伝承されている地域を予め概観しておく。先ず顕著なのは、フィンランド、エストニア、リトアニア、ラップランド、ノルウェー、デンマーク、アイスランド等の極北を含む北欧である。次に、スコットランド、アイルランド、ドイツ、オーストリア等、またスペイン、イタリア、ギリシア、さらにハンガリー、スロベニア、ロシア等がヨーロッパの分布範囲のようで、非ヨーロッパ系では、トルコ、インド、インドネシア、中国等、最後にフランス系・イギリス系・スペイン系アメリカの名が挙げられている。全体的な傾向としては北欧が圧倒的に多く、他に、西欧、南欧および東欧、そしてアジアの国々と新大陸が伝承圏である。本稿では、北方としてアイスランド（『エッダ』）とエスキモー（ラップランド他）、西欧ではドイツ、アジアからは、中国の他、A T には欠如

している日本（アイヌと沖縄を含む）の天人女房譚を取り上げる。

## 第一章 昔話二題（日本／ドイツ）

『日本昔話事典』<sup>(7)</sup>によると、「天人女房」は現在約一三〇話が報告され、大きく三つのタイプに分類される。〈離別型〉、〈天上訪問型〉および〈七夕結合型〉である。隠された羽衣を発見して天女が飛び去る〈離別型〉は、東北から沖縄まで約三〇話、男（夫）が蔓を伝って天女に再会する〈天上訪問型〉は、全国で約六〇が採話されており、天上で再会した後、（瓜を割ったために）洪水で流される途中、天女が七日七日に会おうと言ったのを男が七月七日に聞き間違える〈七夕結合型〉は、主に西日本と南西諸島に約三五話伝わっている。

『日本昔話名彙』<sup>(8)</sup>の中で、「天人女房」を「幸福なる婚姻」に分類した柳田國男は香川県の話（〈七夕結合型〉）を少し詳しく紹介した後、東北（青森、岩手、秋田、福島）、中部（新潟、長野、岐阜、愛知）、山陰・山陽（鳥取、島根、広島、山口）、四国（徳島、香川）、九州（熊本、長

崎、鹿兒島)のものを列挙し、最後に「参考」に沖縄、朝鮮等の例を追加している。彼の論考に関しては以下、随時触れることにし、先ず、稲田浩二編『日本の昔話』から一例覗いてみたい。

一 A 「天人女房」島根県

昔、炭焼きのおやじがいた。ある時、天から美しい姫が舞い降りて来て、羽衣を木の枝にかけ水浴びをした。炭焼きは出来心で羽衣を盗んで家に帰った。姫は煙が出ていた炭焼きの家に行き、羽衣のことを訊ねたが、おやじは知らないと言った。姫は困って炭焼きの嫁になった。三年後、男の子が生まれ、てっぱちという名をつけた。成長したてっぱちは羽衣を見つけ、母親にそれを見せた。帰って来た炭焼きに母親は、明日子供を連れて天に上がると告げ、あなたも天に来たかったら、門先にほうの木を植えて毎日酒を注げば七斗で木は天に届くから、それを登ってくるように言った。天人はてっぱちを抱え羽衣をかけて空に消えた。六斗酒を注いだ時、炭焼きはほうの木を登るが、天に届かず、てっぱちの名を呼ぶと、息子が天から布を下げて父親を引き上げた。天人

は夫に舅「しゅうと」がどんな難題を出しても、引き受けるように忠告した。夫は次々出される難題を天人の援助で解決したが、瓜の草を取っていた時、天人に食べないように言われたにも拘わらず、喉の渴きのあまり食べってしまった。すると大水となり、天人と夫は川で隔てられ、天人が毎月七日に会おうねと言ったが、川の音で聞こえず、夫は七月七日に会おうと答えた。二人はそのため年に一度しか会うことが出来なくなった(要約)。

水浴び(天女)、羽衣の隠匿(炭焼き)、子供(てっぱち)の誕生と羽衣の発見(同)、天への帰還(天女と子供)、蔓植物による天界行(夫⇨炭焼き)、舅(天女の父)が出す難題、瓜を食べたことに由る大洪水(夫)、川辺での年に一度の再会(夫婦)、以上、右の物語は西日本に多い典型的な(七夕結合型)の天人女房譚である。

「序」で触れたアールネ/トンプソン『昔話のタイプ』は、A T 四〇〇「失われた妻を捜し求める男」The Man on a Quest for his Lost Wifeの構成要素として、(1)主人公/(2)魔法をかけられた王女/(3)故郷訪問/(4)妻の喪失/(5)探訪/(6)再会の六つを挙げる。

池田弘子の『日本民間伝承のタイプとモティーフ索引』四〇〇番はそれに対して、「失われた天上の妻を捜し求める男」を掲げ、〈天上の〉Catalpaを加える。<sup>(1)</sup>〈天上訪問型〉あるいは〈七夕結合型〉が多い日本に相応しい追加と言える。次に、ヨーロッパの例としてドイツの昔話を読んでみたい。

#### 一B 「七羽の鳩」(ドイツ)

昔、ある伯爵が狩りに出て森で迷い、ようやく宿屋を見つけ泊まった。翌朝、窓から外を見ると、裏の池で美しい娘が七人泳いでいた。女主人に訊くと、あれは七羽の鳩で毎朝来ると言う。娘を一人ももらえないか伯爵が問うと、女主人は水浴び中に肌着を奪えばいい、と教えた。その翌朝、鳩たちが飛んで来て、娘の姿に変身し水浴びを始めた。伯爵は一番美しい娘の肌着を取って藪に隠れた。水から上がった鳩の中六羽は飛び去ったが、一番美しい娘は肌着を探して泣いた。そこに伯爵が現れ、彼女を馬に乗せ城に連れ帰り、二人は結婚した。数年後、伯爵が戦争に出征したとき、妻は伯爵の老母に長持が開かず悲しいと訴えた。伯爵はその中に例の肌着を隠

していたのだ。妻は老母に哀願して鍵をもらい、長持を開け肌着を手に入れ山を越え消えた。

城に戻った伯爵は母から話を聴き、森の宿屋へ行った。女主人は言った、鳩(娘)たちはブロックスベルク(ブロッケン山)の母親(悪い魔女)の許で山羊となっている。飛び乗って山を駆け上ればいい、と。伯爵は頂上で山羊から降り、家から出て来た魔女に妻に会いたいと告げた。そして居間にいた妻を連れ帰ろうとする。と、魔女は伯爵に樅の森を切り倒し薪にせよと命じた。妻の魔法でこの難題を片付けると、魔女は、牧草地を刈るように、次は、池に礼拝堂を建て岸から岸に橋をかけよと命じた。すべてをやり終えた夜、妻は母(魔女)が伯爵の命を狙っていることを明かし、二人は逃走した。伯爵は長女に百マイル靴で後を追わせるが、妻は夫(伯爵)を薔薇の藪に自分を薔薇の花に変身させて逃れた。次に魔女は次女に二百マイル靴で追跡させるが、妻は夫を礼拝堂に自分を神父に変身させてかわした。最後に魔女が三百マイル靴で追うが、二人は境界(国境)を越えていた。魔女は胡桃の実を娘に投げた。娘(妻)がそれを割ると中に黄金が詰まっていた。それは魔女から

娘への遺産だった(要約)<sup>(12)</sup>。

右の「七羽の鳩」Die sieben Taubenは、ゴットフリート・ヘンセン編『民衆は物語る。ミュンスタールラントの伝説、昔話および笑話』Gottfried Henssen, Volk erzählt. Münsterländische Sagen, Märchen und Schwänke, 1935所収の昔話である。<sup>(13)</sup> ミュンスタールラントはドイツ北部ヴェストファーレン北西の地方で、その都市ミュンスタールMünsterの歴史は古く、八世紀末にはカール大帝が基礎を築き、十二世紀前半に市となり、十四世紀にハンザ都市として繁栄した。宗教的には、カトリックの司教座がある。<sup>(14)</sup> グリム兄弟に「踊ってすり切れた靴」(KHM一三三)等の昔話を伝えたイェニー・ドロステーヒュルスホフは当地の古い貴族であった。<sup>(15)</sup>

さて、「七羽の鳩」の前半、伯爵は水浴びしていた美しい娘(Ⅱ鳩)を見初め、宿屋の女主人の助言通り、娘の肌着を奪うことで、娘を手に入れ結婚するが、留守中に妻は彼が隠していた肌着を発見し飛び去って行く。ここまではドイツ版の羽衣伝説である。ただし、鳥の種類は白鳥ではなく鳩となっている。後半、伯爵は行方不明の妻を捜す。

ここからはAT四〇〇「失われた妻を捜し求める男」の物語である。場面は、ドイツの昔話らしく、ブロックスベルクBlockberg、別名、ブロックケン山Blockenである。ヴァルプルギスの夜に魔女たちが集まり、悪魔と宴会を催すと言われる、ゲータの『ファウスト』でも有名なハルツ山中の伝説の山である。<sup>(16)</sup> 七羽の鳩たちの母親は、実は、「悪い魔女」eine schlimme Hexeであった。娘たちは山羊の姿でこの山を駆け回る。頂上の家に着いた伯爵は、妻を見つけ連れ帰ろうとするが、魔女は難題を出す。この場面で想い出されるのは、島根県の「天人女房」である。ここでは、天界に上がった炭焼きに、天女の父親(舅)が粟畑の種まきや瓜の草取り等、法外な仕事を課す。夫は妻(天女)の援助でそれを片付ける。同様に、伯爵も魔法を心得る妻の手助けで難題を次々とやり遂げる。以上は、いわば〈天上訪問型〉である。

池田弘子編の日本昔話タイプ四〇〇番は、(1)主人公／(2)天女／(3)妻が天界に帰還する／(4)夫の天界行／(5)仕事／(6)瓜のタブーを物語の基本要素として掲げる。<sup>(17)</sup> 「七羽の鳩」をこれに当てはめると、「主人公」(Ⅱ伯爵)／「天女」(Ⅱ娘Ⅱ鳩)／「妻が天界に帰還

する」(＝娘のプロックスベルク帰還)／「夫の天界行」(＝伯爵のプロックスベルク行)／「仕事」(＝樅の森の薪づくり等)といった具合にほぼ一致する。但し、(6)瓜のタブーに関しては、「七羽の鳩」と「天人女房」は大きく異なっている。すなわち、前者、ドイツの昔話には七夕譚はない。同モチーフは、中国の影響下に、わが国で独自に発達したようだ。<sup>(18)</sup> 瓜を食べタブーを犯したために、「天人女房」の夫(炭焼き)と妻(天女)は大水で出来た川で引き離されてしまうが、この部分、「七羽の鳩」では、いわゆる(呪的逃走) magische Flucht のストーリーが展開される。しかも物語は、メルヘンらしく軽やかに、同時に心温まる決着を迎える。娘夫婦が「境界」(国境) *die Grenze* を越えたことが分かると、魔女(母)は娘に「胡桃」Walnuts を投げる。胡桃は「秘密の宝の隠し場所」のシンボルとして、民話や伝説で用いられるが(『世界シンボル事典』)、伯爵に難題を課して苦しめた「悪い魔女」も、娘には「黄金」を胡桃に包んで「遺産」として手向けろ。魔女の母親としての愛情が物語全体を締め括る。

## 第二章 羽衣伝説(古代)

天人女房譚、別名羽衣伝説はわが国では、静岡県三保の松原、滋賀県伊香郡余呉湖、鳥取県東伯郡羽衣石「うえし」が有名で、<sup>(20)</sup> 柳田國男も折りに触れそれらに言及しているが(『海南小記』、『昔話と文学』等)、<sup>(21)</sup> 余呉湖に関する『近江国風土記』逸文は中でも最も古い記録の一つで、次のような内容である。

### 二 A 『近江国風土記』

伊香「いかご」の小江

古老が伝えるところでは、近江の国の伊香郡与胡「よご」の郷、伊香の小江に天の八女「やをとめ」が白鳥となって天から降り、江の南で水浴びをした。伊香刀美「いかとみ」という人が山から白鳥を見て奇異に感じ、神人「かみ」ではないかと思つて行つてみると、神人であった。愛情がおこり、伊香刀美は白い犬をやつて、一番若い娘の天の衣を盗ませ隠した。姉の七人は天上に飛び去つたが、衣を奪われた末娘は地上の人となつた。伊

香刀美は娘と夫婦となり、男二人女二人の子供が生まれた。彼らが伊香連「いかこのむらじ」の先祖である。後に、母親は羽衣を捜し、それを着て天に昇った。孤独な伊香刀美は嘆き悲しんだ(要約)。(22)

逸文の出典は古く、『帝王編年紀』(七一七―七二四年)「養老七年条」、すなわち七二四年である。右の話は天人女房譚の〈離別型〉で、かつ始祖伝説である。柳田はここに羽衣伝説の基本形を認め「近江式」あるいは「伊香刀美系」と名付けているが(『昔話と文学』「竹取翁」)、この『風土記』より古い記録として、中国の六朝時代に成立した干宝『搜神記』(四世紀)を読んでみたい。三五四「鳥の女房」の物語は次の通りである。

## 二B 「鳥の女房」(『搜神記』)

豫章郡新喻県(江西省)に住む男が田の中に六、七人の娘を見かけた。みな毛の衣を着ていて、鳥か人間か分からない。男が一人の娘の毛の衣を隠して近寄ると、鳥はみな飛び去った。逃げる事が出来なかった娘を男は連れ帰って女房とし、三人の娘が生まれた。その後、女

房は娘たちを通じて夫が毛の衣を稲束の下に隠したことを知り、それを見つけ身につけて飛び去った。しばらく後、母親は三人の娘を迎えに来て、みな一緒に飛び去った(要約)。(24)

『昔話百科事典』(EM)は右の物語を世界最古の「白鳥処女」として紹介する。(25)

羽衣伝説のいわば祖型である。天女の水洗び、毛の衣の隠匿、結婚、子供の誕生、衣の発見、妻と子供の天界行、羽衣譚の基本的な要素はすべてここに出揃っている。タイプ的には〈離別型〉である。同じ〈離別型〉の沖繩の話で柳田國男は『海南小記』(「南の島の清水」)の中で紹介する。内容はこうである。

那覇近郊の農夫、銘苧子「めかるし」が田から帰る時、泉で手足を洗おうとすると、女の長い毛髪が一本浮いていた。折々泉近くで様子を窺っていると、ある時、神女が衣服を木の枝に掛けて髪を洗っていた。銘苧子は衣を隠し、神女を家に連れ帰り妻とした。一女二男が生まれ、女兒が成長して弟の子守りをしていた時、彼女は母の「飛衣」と「びぎぬ」が倉の稲束の下に置いてあると歌った。母はこ

れを聴き、夫の留守に衣を捜し出し、天界に飛び去った。<sup>(26)</sup>

稲束の下に羽衣を隠す件は、前述『捜神記』と同じで、農耕儀礼を背景にした婚姻譚をそこに探る研究もあって興味深い。<sup>(27)</sup> 中国の天人女房譚と沖繩のそれが酷似していることもさることながら、ここで注目したいのは、以上見てきた「天人女房」（島根県）、「七羽の鳩」（ドイツ）、『近江国風土記』そして『捜神記』（中国）、いずれにおいても男が偶然目撃した娘（神女）たちの「衣」が鳥の羽であることだ。『風土記』はそれを「白鳥」と名指している。いわゆる「白鳥処女」の羽である。天上と地上、神と人間を媒介する存在としての鳥。大空を飛び回る鳥類が、天と地を結ぶ役目を担うのは、ある意味、ごく自然で人類に共通の想念かも知れない。<sup>(28)</sup> ただ、羽衣伝説における鳥と人間の結婚、換言すれば、異類婚姻は破局に終わるのが原則のようである。<sup>(29)</sup> 事実、『捜神記』や『風土記』といった古い記録は（離別型）を示している。人間心理の視点から見ても、伝説の中で策略（羽衣の隠匿）を用いて処女を己の妻にする男は（離別型）を予想させる。なぜなら、女の立場からすれば、子供の誕生等、その後の生活がどうであれ、意識のどこかにそういう男（夫）に恨みが残るのは必定で、破

局は避け難いからだ。

さて、アールネ／トンプソン『昔話のタイプ』A T 四〇〇は題名「失われた妻を捜し求める男」の後に、括弧つきで「導入としてしばしば白鳥処女」と記す。<sup>(30)</sup> 「白鳥乙女」Swan Maiden は、ちなみに、『昔話百科事典』の「白鳥処女」Schwanjungfrau の項目でも、A T 四〇〇の代表例とされる。<sup>(31)</sup> そして、この白鳥処女のヨーロッパ最古の記録として、同事典は古代北欧歌謡集「エッダ」Edda 中の「ヴェルンドの歌」Volundarkvæða を挙げる。<sup>(32)</sup> 歌の内容は次のようである。

## 二C 「ヴェルンドの歌」（「エッダ」）

スヴィジオーズ「スウェーデン」にニーズズという王がいた。二人の息子と一人の娘があった。またフィン王にスラグヴェイズ、エギル、ヴェルンド「ドイツ名ヴェーラント」という名の三人の息子がいた。彼らが狩りをしていると、池の辺で三人の女が亜麻を織っていた。傍らには白鳥の羽衣が置いてあった。彼女たちはヴァルキューレであった。その中の二人はフレズヴェール「フランク王クロードヴィヒ」の娘スヴァンフヴィートとア

ルヴィトで、もう一人はヴァルランド「フランス」の皇帝の娘エルルン「ドイツ名アラウン」であった。兄弟たちは彼女らを家に連れ帰った。エギルはエルルン、スラグヴィズはスヴァンフヴィート、ヴェルンドはアルヴィトを妻にした。彼らは七年間暮らしたが、その後、妻たちは戦場へ飛び去った。エギルとスラグヴィズは妻を捜しに行ったが、ヴェルンドは鍛冶をしながら妻の帰りを待った(要約)<sup>(33)</sup>。

その後、鍛冶の名人ヴェルンドはニーズズ王に捕えられ島に幽閉されるが、島に来た王の二人の息子を殺し娘を孕ませ、王に復讐する。そして王の家に奪われた水掻きを取り戻し空中に飛び上がって島を去る。<sup>(34)</sup>

前半は羽衣伝説、後半は復讐譚である。池の辺の牧歌的な風景、島での陰惨な復讐、その明暗が対照的な物語である。注目すべきは、「ヴェルンドの歌」の乙女たちがヴァルキューレであることだ。古ノルド語で「(死者を)選ぶ者」*valkyria*を意味する「ヴァルキューレ」*Walkie*は、主神オーディンに仕える武装した乙女たちで、戦場で倒れた勇士を天上のヴァルハラ宮殿に導いて行く。言ってみれば、

異界の使者であり、人間の運命を決める(織る)者たちである<sup>(35)</sup>。ヤーコフ・グリム Jacob Grimm は『ドイツ神話学』*Deutsche Mythologie* (一八三五年)の中で、ヴァルキューレに関して、彼女たちの「飛ぶ」能力と「泳ぐ」能力(白鳥)、そして「予言する」=「亜麻を織る」(運命の糸を紡ぐ)役割に特に注目し、「白鳥処女」伝説が当時も民間に語られていたことを記している。<sup>(36)</sup>「ヴェルンドの歌」はまさしく古代北欧の羽衣物語に他ならない。

ところで、『エッタ』には作者不詳の「歌謡エッタ」(=古エッタ)とスノリ・ストゥルルソン Snorri Sturluson (一一七九—一二四一年)作「散文エッタ」(新エッタ)があるが、「ヴェルンドの歌」は「歌謡エッタ」の中の(英雄の歌)に分類される。<sup>(37)</sup>「歌謡エッタ」の多くは九世紀から十二世紀の間に成立したと推定されているが、「ヴェルンドの歌」はゲルマン民族大移動の時代(三七五年以降)に由来する初期の作品(五世紀頃?)と言われる。<sup>(38)</sup>想えば、ユーラシア大陸の東端(中国)に成立した物語集『捜神記』と、同大陸の遙かな西端からさらに海を渡ったアイスランドに伝承される歌謡集『エッタ』に、類似の羽衣伝説が残存しているのは驚嘆に値する。

以上、中国の『搜神記』、わが国の『風土記』、そして北  
欧の『エッダ』いずれにも、我々は「白鳥処女」のいわば  
原風景を見ることが出来る。前述『昔話百科事典』の記述  
によると、「白鳥処女」は、以上の他、ブリヤート人（バ  
イカル湖周辺のモンゴル族）、カザフ人、満州人、アイヌ  
人、そしてエスキモーにも伝承されていると言う。<sup>(39)</sup>ユーラ  
シア大陸の北方ばかりではなく、極北のエスキモー、また  
大陸と日本の結節点に位置するアイヌ人、これらいわゆる  
自然民族の間にも、白鳥あるいは羽衣伝説は伝承されてい  
るのである。

### 第三章 自然民族（エスキモー／アイヌ）

エスキモー Eskimo は、インディアン言葉で「生肉を  
食べる人」の意で、自らは「人間」を意味する「イヌイツ  
ト」 Inuit を称するモンゴル系の人種である。アラスカか  
らグリーンランドに至る北アメリカおよび北東シベリアの  
極北地帯に住み、狩猟と漁労で生活し、以前は数家族の小  
さな単位で暮らしていたが、今日ではかなり大きな集落  
に、シベリアでは一、五〇〇人、アラスカは三〇、〇〇〇

人、カナダに二五、〇〇〇人、そしてグリーンランドでは  
四一、〇〇〇人居住している。宗教的にはシャーマニズム  
を特色とする。<sup>(40)</sup>

一方、元々「人間」を意味するアイヌ Ainu は、北海道  
とサハリン（樺太）に約一七、〇〇〇人居住する民族で、  
以前は千島列島や東北地方にも暮らしていた。コタンと呼  
ばれる集落に、狩猟と漁労および採集で生活を営んでいた  
が、幕藩体制下の支配・搾取と明治政府の同化政策によつ  
て、伝統文化は破壊され人口も激減した。<sup>(41)</sup> 彼らは豊かな口  
承文芸を有し、詞曲に「神謡」（カムイユーカーラ）、聖伝  
（オイナ）、英雄叙事詩（ユーカーラ）、散文物語に「神の物  
語」（カムイウエペケレ）、「人間の物語」（アイヌウエペケ  
レ）がある。以上は一人称で語られ、他に三人称で語られ  
る昔話もある。<sup>(42)</sup> 以下、エスキモーとアイヌ、それぞれ一例  
ずつ昔話を読んでみたい。

#### 三 A 「人間の妻になった鴨」（エスキモー）（『世界の民話』）

昔、一人の男と妻と息子がいた。妻は若者となった息  
子に嫁を捜すように言ったが、息子にはその気がなかつ  
た。ある日、彼はカヤックに乗って鴨など獵獣を捜しに

行つた。あざらしの肉を食べながら、何日も川を遡つた。ある午後、陸に上がると、かくれんぼをしている裸の娘たちがいた。忍び寄つて様子を見たとき、若者は一人の美しい娘に心惹かれた。茂みに隠れて、彼は娘を捉まえた。翌朝、若者は娘をカヤックに乗せ家を目指した。母は心配して息子を待つていたが、カヤックの娘を見て、嫁が来たことを喜んだ。息子の妻は肉を好まず、草を摘んで食べた。日々が過ぎ、若者が猟に出かけると、妻は家で手袋や長靴等を整えた。しばらくして、妻は息子と娘を生んだが、草しか食べなかつた。ある日、老母が嫁に「あなたは鴨なの？」と問うと、妻は怒つて子供を連れて出て行つた。

晩、家に帰つた夫は老母から妻と子供たちが家を出たことを聞いた。若者は母親に腹を立て、妻を捜しに出発した。そして妻の足跡を見つけ後を追つた。足跡には鴨のような水掻きがついていた。ある晩、一軒の家を見つければ近づく、一人の男がいた。若者が妻は何処かと訊ねると、知らないと言った。若者が斧を贈ると言う、奥さんは昨夜ここにいたが今朝出発したと男が教えた。若者は別の家に着き、家の男にあざらし皮のスポンを約束

すると、奥さんは子供を二人連れて今朝出掛けたと言つた。三軒目の家で、若者は毛皮のマントを贈つて、家の男から奥さんは湖の方へ行つたと知らされた。湖を渡ることが出来ず、彼が眠っていると、赤狐が来た。狐が頭巾を取ると人間だった。狐は、立ち止まらずに向こうの山を登ればそこから奥さんが住んでいる大きな家が見える、息子も娘も成長していると教え、若者を背中に乗せ走つた。山の麓で若者は狐に別れを告げ頂上を目指した。到着すると眼下に例の大きな家が見え、家から二人の男が出て来た。若者は茂みに隠れ、柳の枝で男たちを打ち殺し穴に埋め家へ向かつた。少年が出て来て、お父さんが来たと言ったが、母は信じなかつた。お父さんは遠く、お父さんのお母さんが嫌な人だから私たちがここに来たと言った。夫が家に入ると、別の男がいた。この女は私の妻だと告げると、男は姿を消した。妻は言つた、ここは遠く、エスキモーが来られるわけがない、ここは私の国、鴨の国だと。夫が立ち止まらずに懸命に山を登つたことを話すと、妻はようやく信用した。

舅（妻の父）は言つた、ここにはトナカイ、あざらし、鯨、鴨、柳、風があるが、余所の人間が攻めて来る

から用心しなければならぬ、と。若者は妻の一族の許に留まり、攻め寄せて来たエスキモー鴨の大群を杖で撃退した。しかし、妻が二人目の息子を生むと、息子と娘を残し、妻と赤子を連れて故郷を目指し出発した(要約)<sup>(43)</sup>。

右の昔話の語り手はアラスカ・ノメ出身の人物である<sup>(44)</sup>。短篇小説のようなこの物語は三部から構成される。第一部は、猟に出た若者が偶然、川辺で仲間と遊んでいた美しい娘を見初め、彼女を捉まえ妻とする。妻が肉を好まず草を食べたことで、彼女が鴨の変身した姿であることが暗示されている。日々が過ぎ、妻は息子と娘を生むが、夫の老母が「あなたは鴨なの?」と問うたために、妻は家を出て行く。ここまで、まさしくエスキモー版の天人女房譚である。ただ、美しい娘は白鳥ではなく鴨となっている。

第二部はAT四〇〇「失われた妻を捜し求める男」の話である。若者(夫)は妻の足跡を追い、三軒の家で贈り物と引き換えに男たちから消息を聞き、湖畔の赤狐に妻の居場所を知らされ、山の麓まで運んでもらう。艱難辛苦の挙句、彼は山を登り頂上から妻がいる家を発見し、妻子と

再会する。以上は一種の(天上訪問型)物語である。世界は、人間界と異界(動物界(鴨の国))に分かれている。

第三部は異界での若者の生活を描く。エスキモー鴨の大群を撃退する場面は、鳥根県の「天人女房」やドイツの「七羽の鳩」にも見られる難題解決の部分に相当する。日本の(七夕結合型)では、ようやく再会した夫と妻は大水の川で隔てられて年に一度しか会えなくなるが、エスキモー民話「人間の妻になった鴨」では、夫と妻は、再会後、妻の実家(異界(動物界))に息子と娘を残し、赤子を連れて夫の故郷(人間界)に帰還する。人間の国と動物の国の間に境界(距離)がありながら、子供を媒介に、二つの国の居住者は別個に幸せに暮らしてゆくことになる。独特な天人女房あるいは白鳥(鴨)処女譚である。

### 三B 「ルルバの少年」(アイヌの昔話)

ある村に私(ルルバの少年)は暮らしていた。近くの一本の巨大なヤチダモの木の上には雄と雌のおじろ鷺が棲んでいた。私が食べたくなると美味しい物が、喉が渴くと水があった。おじろ鷺が食べ物を運んでくれたのだ。二年も三年もそれが続き、私はおじろ鷺の夫婦の話

を聞き分けられるようになった。ある日雄のおじろ鷺が二、三日どこかへ飛んでいき、帰ると雌に、遙か彼方の島に行った様子を語った。そこでは天上の神々が遊び戯れる広場がある。巨大なヤチダモの木に泊まって見ていると、夜中、神々が降臨し、島の岬に行つて歌をうたい、英雄の物語を演じていた、と。

私はその話を聞いて、夜中、育ての親（＝鷺）が寝ている間にその広場を目指した。浜辺へ行き小舟に乗り沖に出て、翌日の暮れ方まで舟を漕いだ。島影が見え上陸した。私は巨大なヤチダモの木の繁る葉の下に舟を隠し様子を窺つた。すると空の彼方から神々が現れ、降下し戯れ始めた。彼らは岬に行き、古い物語、英雄や神々の物語を演じた。そして夜明け前、休息した。すると、神々の中の幼い少女が神の衣を脱いで、岩間に隠した。私はその羽衣を引き寄せ身にまとつた。神々が天界へ上り始めたとき、少女は羽衣が見つからず戸惑つた。私は少女を抱きかかえ、隠した舟に乗せ村を目指し漕いだ。そして真夜中に家に戻つた。

夜明けに、育ての親の雄のおじろ鷺が妻に話すのが聞こえた。我らが育てたルルパの少年は成長し妻を娶つ

た。これで安心、我らは自分たちの村へ帰ろう。こう話すとき、育ての親はヤチダモの木の上から私にこう告げた。少年よ、お前や両親や祖先がかつて住んだルルパ村（ルルパの村）には多くの人が平和に暮らしていた。しかしある時、性悪の神に荒廃させられ、幼いお前が一人残された。多忙な神々は我ら鷺夫婦にお前の世話を任せた。私の名は「鷺鳥の王」、お前は無事成長し、妻も神々に与えられた。お前はルルパで暮らし木幣を作つて我らに祈り、大地を統率する火の神に木幣を捧げよ。

木幣作りはこうして私によつて再開された。私は感謝し、歌、英雄の物語、故事来歴談、神々の物語、そして昔話を後世に伝え始めた（要約）<sup>(45)</sup>。

右は、サハリン（旧樺太大泊郡）の野村兵蔵が語つた昔話である。<sup>(46)</sup> アイヌ独特の一人称形式で語られるこの物語では、おじろ鷺に育てられたルルパの少年が、成長し妻（少女の神）を娶り、鷺から村の由来譚と口承文芸、そして神々への感謝を教えられ、以後それを伝承してきた経緯がイメージ豊かに語られ、少年が少女の神に出会う場面に羽

衣伝説が垣間見える。神々は、夜中、遙かな鳥の広場に降臨し、歌や物語を演じて戯れるのだが、天空から大地に下り、また天に上昇する時、羽衣を用いる。ルルパの少年は少女神の羽衣を奪うことで彼女を妻にする。少年が住む家の側と神々が降臨する島にはヤチダモ（谷地だも）の木が立つ。谷地だもはモクセイ科の落葉高木で、わが国では北海道と中部地方以北に生え、大形の葉をつけ、材は器具に用いられる。人間と鳥にとつてきわめて有用な植物である。少年を育てたおじろ鷲は、最後に、木幣を作つて神々に捧げるように命じる。イナウ（イナオ）と呼ばれるアイヌの木幣は、人間と神々を結ぶ神事用具で、主にヤナギで制作され感謝の贈り物として神々に奉納される。ルルパの少年の育ての親、おじろ鷲に関しては、次章で詳しく触れることにする。羽衣伝説「ルルパの少年」は、以上のように、アイヌの民俗を知る上にも貴重な情報を数々提供してくれる。

#### 第四章 天女／羽衣／鳥

以上、昔話（日本／ドイツ）と古代の羽衣伝説（風土記

／搜神記／エッタ）そして自然民族（エスキモー／アイヌ）の天人女房（白鳥処女）の物語を読んだが、それらに共通した要素を我々は認めることができる。先ず、主人公すなわち天女その人である。

「天人女房」（島根県）の中で、炭焼きと結婚した「お姫さん」は、夫が自在鉤の中に隠してあった「羽衣」を息子のてっぱちが発見すると、自分は「天の人間」であること息子に明かし、夫に「これでお暇をもらつて、明日は天へ上がるかと思う」と告げる。またドイツ昔話「七羽の鳩」では、伯爵と結婚した「美しい娘」は、夫が長持に隠してあった「肌着」を見つけると、山を越え消えてしまふ。

古代の伝承『近江国風土記』逸文（八世紀）の中で、「天の八女」は伊香刀美（夫）が隠した羽衣を探しだすと、それを着て天に昇つてしまふ。最古の羽衣物語である中国の『搜神記』（四世紀）でも、男の女房となった「娘」は、稲束の下に隠されていた毛の衣を見つけると、それを身につけて飛び去り、後に三人の娘を迎えに来て一緒に飛び去つて行く。北欧歌謡『エッタ』『ヴェルンドの歌』（五世紀頃）では、ヴァルキューレである「王女」たちが七年間

それぞれの夫と暮らした後、(白鳥の)羽で戦場へ飛び去る。

自然民族の話でも状況は似ている。「人間の妻になった鴨」(エスキモー)の民話では、若者の妻となった「娘」は、姑に「あなたは鴨なの?」と訊かれ、子供たちを連れ出て行く。唯一の例外は、「ルルパの少年」(アイヌ)における「神々の中の少女」で、彼女は隠された「羽衣」を探すこともなく、少年の妻となり一族の祖となる。

要するに、「天人女房」(白鳥処女)タイプの物語では、天に由来する女性は、地上の生活で子供が生まれても、結局は「羽衣」を着て故郷である天上へ還って行くのである。わが国の天人女房譚の多くの類話を研究した柳田國男は、「天と地との交通ということとは、当初の羽衣説話の主要なる目標であった」(『年中行事覚書』<sup>49</sup>)としながら、『因伯昔話』に採録された「羽衣石山」(うえしやま)の口碑を紹介し、農夫の妻となった天人が、舞の羽衣を着ると、「たちまち人界の心を失って、天へ還って行く気になった」点に注目する(『昔話と文学』/『年中行事覚書』<sup>50</sup>)。天界と人間界の間には超え難い何かがあって、羽衣を着た天人は否応なくそれを想い出し故郷である天空に向かって飛翔し

て行く。

次に、天女(白鳥処女)が天上と地上を往来する際に用いるのが鳥の羽である。「天人女房」(鳥根泉)では「羽衣」の鳥の種類は不明だが、「七羽の鳩」(ドイツ)は題名にすでに種類を明示し、『近江国風土記』では「天の八女」とともに白鳥となって天から降り「江の南で水浴したと語る」<sup>(51)</sup>。『搜神記』の「鳥の女房」の鳥は種類が分からないが、『エッタ』は、池の辺で亜麻を織る乙女たちの傍に「白鳥の羽衣」が置いてあったと伝える。<sup>(52)</sup>自然民族の伝承では、エスキモーのものが明確に鳥の種類を「鴨」と語っているが、アイヌの物語では「神の羽衣」の種類は示されていない。しかし、ルルパの少年を育ててくれたのは「鶯鳥の王」おじろ鶯である。

以上、白鳥、鳩、鴨、鶯といった種類が、羽衣伝説を担う鳥のようであるが、各鳥に纏わる伝承と特色を素描すると、先ず、白鳥は「高貴な純潔の化身」として、古代ギリシアではアポロンの聖鳥であり、神から予言能力を授けられたとされる。ちなみに、アポロンは北方に住むヒュペルポレオイ人が特に崇拜した神である。またゲルマン人の許では、処女は予言能力のある白鳥処女に変身できると信じ

られており（『図説世界シンボル事典』<sup>(53)</sup>）、『エッダ』にそれは明瞭に示されている。

一方、鷺は「鳥類の王」として、至高の権力や卓越した能力の象徴とされ、古代ギリシアでは、人間には近づき得ない天の領域でも自在に飛翔できると伝えられていた。古代中国でも、鷺は力と強さのシンボルで、英雄の気性を表す鳥であった（同）<sup>(54)</sup>。アイヌ昔話の「おじろ（尾白）鷺」は大形で、翼を開くと二メートルを越し、ユーラシア中・北部やグリーンランドに分布し、日本には冬鳥として飛来して北海道東部で繁殖する天然記念物となっている。「ルパの少年」はこの尾白鷺に育てられ、アイヌの立派な先祖となる。

鳩と鴨が羽衣伝説に登場するのは少し意外だが、前者、鳩はギリシアの伝承によれば、ドドナの樅の木にとまって神託所を開くよう促したとされ、その聖林で予言を行う巫女はペレイアイ peleiai（鳩たち）と呼ばれた<sup>(55)</sup>。またゲルマン神話では、鳩は「魂の鳥」としても知られる（J・グリム『ドイツ神話学』<sup>(56)</sup>）。他方、鴨は人間に身近な水鳥だが、野生の鴨は早くから狩りの対象となっており、エスキモーの昔話でも、若者は狩猟で鴨を捜しに出かけている<sup>(57)</sup>。

さて、『昔話百科事典』の「白鳥処女」の項に注目すべき記述がある。すなわち、狭義の白鳥処女伝説が分布している地域は、北部ユーラシアのシャーマニズム地域と一致し、後者との密接な関わりを推察させる、と<sup>(58)</sup>。白鳥の姿で水浴する乙女、白鳥の羽で天上の神々の許へ飛んで行く乙女は、鳥の衣裳を着たシャーマンを想起させるのである。

同事典は、白鳥処女が伝承されている地域として、シベリア、カザフ、満州、モンゴル、アイヌ等の東アジアの他、北欧とエスキモー等を挙げる。ルーマニア出身の宗教学者ミルチア・エリアーデ Mircea Eliade（一九〇七—八六年）は、興味深いことに、名著『シャーマニズム』<sup>(60)</sup>の中でこう語っている。すなわち、シャーマンの衣裳の中でも、鳥の衣裳は、アルタイ、シベリア民族、満州族そしてモンゴル人等に見られるが、それは「他界への飛翔に欠くべからざるものである」<sup>(61)</sup>。シベリアの極北地方には「水鳥の像」（白鳥等）がシャーマンの衣裳に付けられ、エスキモーの間では鷺はシャーマンの手足になって奉仕すると信じられている<sup>(62)</sup>。また古代ゲルマン人の神話のテーマの起源は「北アジアおよび中央アジアにある」と<sup>(63)</sup>。

シャーマニズムは特に北ユーラシアの狩猟民族に広く分

布するが、ゲルマン人においてもその痕跡は認められる。例えば、主神オーディンは、ルーネ文字の秘密を知るために、風の吹く樹木に九日間吊り下がったと伝えられる〔「エツダ」〕「オーディンの箴言」<sup>(64)</sup>。

彼の聖鳥は「思考」を意味するフギンと「記憶」の意のムニンの二羽で、オーディンに仕えるヴァルキューレたちは白鳥の化身でもあった。

柳田國男は国際連盟の仕事でジュネーヴに赴く直前、沖繩・奄美を旅し、その後も生涯にわたって南島に強く魅せられていたが、ジュネーヴから帰国後、一九二五（大正一四）年に刊行された『海南小記』の中で彼は白鳥処女の伝説に関して、「神が人間界に配偶を求めたもうこと、鳥の形をしてこの世と往来したもうことは、いたって弘くかつ久しい伝承」であり、「沖繩の島では泉の神の信仰が、明白に物語の一要素をなしていた」と述べたあと、天女に縁「ゆかり」の井（霊泉）に斎宮女王である聞得大君「きこえおおきみ」が親しく拝したことに注目する。<sup>(65)</sup> 沖繩では、巫女の頂点である聞得大君が天女を崇敬していたのである。羽衣伝説と巫女の関わりについて、柳田はさらに晩年の著書『年中行事覚書』（一九五五「昭和三〇」年刊）で

も、「羽衣天女の後胤は、必ず女系を主とする巫女「ふじよ」の家であった」と指摘する。<sup>(66)</sup>

アイヌの昔話「ルルバの少年」の中で、神々の少女は少年と結婚したあと離別せず、一族の祖となるが、沖繩の伝承においても、羽衣伝説は「あるすぐれて旧い家の血筋と、結び付けようとした試み」であり、「天人に男女の児が生まれたという形も、元はこの動機から強調せられたように思われる」、と柳田國男は推測する。<sup>(67)</sup>（離別型）でも（天上訪問型）でも（七夕結合型）でもない今一つのタイプが天人女房（白鳥処女）譚に存在するわけである。沖繩ではそれが巫女（シャーマン）の家系の由来談になっている。まさしくシャーマニズムと天人女房（白鳥処女）譚との並々ならぬ因縁を窺わせる。

### 結語

天人女房／白鳥処女の物語は、以上見てきたように、空間軸に即して、ユーラシア大陸の東端沖（日本）から西端沖（アイスランド）まで東西に、またわが国では南西諸島（沖繩）からサハリン（旧樺太）まで南北に、実に広く伝

承されていることが明らかとなった。時間軸に即して言う  
と、中国の『搜神記』（四世紀）からアイスランドの『エッ  
ダ』『ヴェルンドの歌』（五世紀頃）に至るまで、驚くべき  
ことに、時間差は殆どない。

ヴィルヘルム・グリム Wilhelm Grimm は一八〇八年に  
発表した論文「古代ドイツ文学の成立とその北欧文学との  
関係について」Über die Entstehung der aldeutschen  
Poesie und ihr Verhältnis zu der nordischen の中で、竜  
（ドラゴン）伝説に関して、アジアを発祥の地としたこの  
伝説が、ロシア、プロイセン、バルト海沿岸に達した後、  
ユトランド半島を通つて北欧にまで伝播していったという  
仮説は「あり得ないことではない」と語る<sup>(68)</sup>。この仮説は、  
殆どそのまま白鳥処女（天人女房）の伝説にも妥当するの  
ではあるまいか。

今回は触れなかったが、インド（『カタール・サリット・  
サーガラ』）やインドネシアの民話にも天人女房譚は伝承  
されているのだが、本稿で見たアイスランド、エスキモー、  
アイヌ等、北方の諸民族の間に、その物語は印象的な例と  
多く残している。白鳥処女譚はシャーマニズムの文化圏と  
不思議に一致し、柳田國男も白鳥処女と巫女の関係を考察

した研究を発表している。AT四〇〇に分類される天人女  
房の伝説は、以上のように、口承文学の分野ばかりでは  
なく、文化人類学や宗教学、また民族学や民俗学的にも魅  
力的なテーマを提供してくれる。また天人女房譚は、狭義  
の昔話研究に限っても、柳田が指摘したように、『竹取物  
語』、絵姿女房、瓜子姫等と深く関連していて興味は尽き  
ない。

シャーマニズムもさることながら、一般に、大空を飛翔  
する鳥は人々を天上のロマンへと誘う。とりわけ、白鳥の  
ような渡り鳥は、その飛翔力と空間移動の雄大さによつ  
て、数多の伝説を生んできたようだ。天人女房の物語の原  
点はそうしたところに存在するのも知れない。それにし  
ても、天界と地上の人間との出会いは、〈離別型〉の寂し  
さで終わろうと、〈天上訪問型〉の幸運談であろうと、〈七  
夕結合型〉の年一度の再会であろうと、どこか出会いその  
ものの儚さを内に秘めているように思われる。柳田はそれ  
を「缥缈として霞の空に消え去つたなつかしさ」と語つ  
た。言い得て妙である。<sup>(70)</sup>

註

- (1) 『日本昔話事典』 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田  
晃・三原幸久編、弘文堂、平成一一年(六)年、六二一—  
六三二頁「天人女房」(宮岡洋子)
- (2) Hiroko IKEDA, A Type and Motif Index of Japanese  
Folk-Literature, Helsinki, 1971.
- (3) Anti Aarne and Stith Thompson, The Types of the  
Folklore, Helsinki, 1987 (1961, Second Revision) (AT)
- (4) Enzyklopädie des Märchens, Handwörterbuch zur  
historischen und vergleichenden Erzählforschung,  
Begründet von Kurt Ranke, Walter de Gruyter, Berlin/  
New York, Bd.12, 2007, S.311-318 (Schwanjungfrau) (EM)
- (5) 註(4) EM他
- (6) 註(3) AT p.130-131.
- (7) 註(1) 参照
- (8) 『日本昔話名彙』 柳田國男監修、日本放送協会編、日本  
放送出版協会、昭和四七(二三)年、二五—二七頁
- (9) 『日本の昔話』上、稲田浩二編、ちくま学芸文庫、一九  
九九年、二六〇—二六七頁
- (10) 註(3) AT, p.128-129.
- (11) 註(2) p.96-97.
- (12) Deutsche Volksmärchen, Neue Folge, hrsg.von Elfriede  
Moser-Rath, Eugen Diederichs Verlag, München, 1990 (66),  
S.102-106. 邦訳『世界の民話』一「ドイツ・スイス」小  
澤俊夫訳、ぎょうせい、昭和六三(五一)年、二六一—  
二頁
- (13) 註(12) S.316/320.
- (14) dtv-Brockhaus Lexikon, Deutscher Taschenbuch Verlag,  
München, 1982, Bd.12, S.245 (Münster).
- (15) 詳しくは、拙稿「グリム童話における語りの風土」(『成  
城大学民俗学研究所紀要』第二十九集、平成一七年、八  
六一—八八頁参照)
- (16) Wörterbuch der deutschen Volkskunde, 3. Aufl. Neu  
bearbeitet von Richard Beil, Alfred Kröner Verlag,  
Stuttgart, 1974, S.110 (Brocken).
- (17) 註(2) p.96-97.
- (18) 註(1) 参照
- (19) 『図説世界シンボル事典』ハンス・ビーターマン著／藤  
代幸一監修、藤代・宮本・伊藤・宮内訳、八坂書房、二  
〇〇〇年、一四七頁「クルミ」
- (20) 『昔話・伝説必携』(「別冊國文学」No.四一) 野村純一編、  
学燈社、一九九一年、三五頁、「天人女房」(加藤千代)
- (21) 『海南小記』(大正一四年)、『柳田國男全集』(ちくま文  
庫版)一、一九八九年所収、『昔話と文学』(昭和一三年)  
(同、八、一九九〇年所収)等
- (22) 『風土記』吉野裕訳、平凡社ライブラリー、二〇〇〇年、

- 三五九—三六〇頁「東山道／近江国」
- (23) 註(21)『昔話と文学』二二五頁
- (24) 『捜神記』千宝、竹田晃訳、平凡社ライブラリー、二〇〇〇年、四一七頁「三五四 鳥の女房」
- (25) 註(4) EM, Bd.12, S.311.
- (26) 註(21)『海南小記』四二六—四二七頁
- (27) 註(1) 参照
- (28) 註(19) 二九—二九二頁「鳥」
- (29) 註(1) 参照
- (30) 註(3) AT400, Swan Maiden, p.128.
- (31) 註(4) EM, Bd.12, S.311—318.
- (32) Heldenlieder der Älteren Edda, Übersetzt, kommentiert und herausgegeben von Arnulf Krause, Philipp Reclam jun., Stuttgart, S.7—20. Das Völundlied (Völundarkviða), 邦訳『エッター—古代北欧歌謡集』谷口幸男訳、新潮社、昭和四八年、九三—九八頁「ヴェルンドの歌」
- (33) 註(32) S.9—12.
- (34) AaO, S.13—20.
- (35) Rudolf Simsek, Lexikon der germanischen Mythologie, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart 1984, S.456—58 (Walküren).
- (36) Jacob Grimm, Deutsche Mythologie, Olms-Weidmann, Hildesheim/Zürich/New York, 2003, Bd.1, S.354.
- (37) 註(32)
- (38) Heldenlieder der Älteren Edda, Auswahl, Übertragen, eingeleitet und erläutert von Felix Grenzier, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1993, S.53 (Einführung).
- (39) 註(4) EM, Bd.12, S.311—313.
- (40) 註(14) dtv-Brockhaus, Bd.5, S.142—143. (Eskimo), 註(4) EM, Bd.4, S.457—465 (Eskimos).
- (41) 註(14) dtv-Brockhaus, Bd.1, S.83 (Ainu), 他
- (42) 萱野茂『アイヌの昔話』平凡社ライブラリー、二〇〇四(一九九三)年、「解説」千本英史
- (43) 『世界の民話』一四「エスキモー他」関楠生訳、ぎょうせい、昭和六二(五三)年、三四—四三頁「人間の妻になつた鴨」
- (44) 同「解説」三三三頁
- (45) 『アイヌの昔話』稲田浩二編、ちくま学芸文庫、二〇〇五年、一六二—一六六頁「ルルパの少年」
- (46) 同、一六六頁
- (47) 『日本国語大辞典』第二版、小学館、一三、二〇〇六(二〇〇二)年、一三二頁
- (48) イナウ(イナオ)について詳しくは、『アイヌの伝承と民俗』ジョン・バチラー、安田一郎訳、青土社、一九九五年、九—一二章参照
- (49) 『年中行事覚書』(昭和三〇年)『柳田國男全集』(ちくま文庫版) 一六、一三六頁

- (50) 前掲書『昔話と文学』二二二頁、『年中行事覚書』一四二頁
- (51) 註(二二)、三五九頁
- (52) 註(32) 参照
- (53) 『図説世界シンボル事典』三二二—三二四頁「白鳥」
- (54) 同、四〇三—四〇六頁「ワシ」
- (55) 同、三二五—三二七頁「ハト」
- (56) 註(36) Bd.3, S.246
- (57) 『図説世界シンボル事典』一一六頁「カモ／アヒル」
- (58) 註(4) EM, Bd.12, S.314
- (59) 同 EM, Bd.12, S.311-313
- (60) ミルチア・エリアーデ『シャーマニズム』上下、堀一郎訳、ちくま学芸文庫、二〇〇四年
- (61) 前掲書、『シャーマニズム』上、二七〇—二七一頁
- (62) 同、二六八頁
- (63) 前掲書『シャーマニズム』下、一四八—一五六頁「古代ゲルマン人のエクスタシー技術」
- (64) Die Götterlieder der Älteren Edda. Übersetzt, kommentiert und herausgegeben von Arnulf Krause, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2006, S.61. Die Sprüche des Hohen.
- (65) 前掲書『海南小記』四二六—四二八頁
- (66) 前掲書『年中行事覚書』一三五頁

- (67) 同書同頁
- (68) Wilhelm Grimm, Über die Entstehung der altdutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der nordischen. (Kleinere Schriften, Bd.1) 邦訳、ヴェルヘルム・グリム「古代ドイツ文学の成立とその北欧文学との関係について」谷口幸男訳(『ドイツ・ロマン派全集』第十五卷「グリム兄弟」、国書刊行会、一九八九年所収)
- (69) 註(20) 参照
- (70) 『辞書解説原稿』〈羽衣〉〔定本柳田國男集〕第二十六卷、昭和五二「四五」年所収) 三四一頁

\* 本稿は本学「グローバル研究」プロジェクトの研究成果の一つとして発表するものである。